

# 営農情報

第116号 平成24年3月8日発行

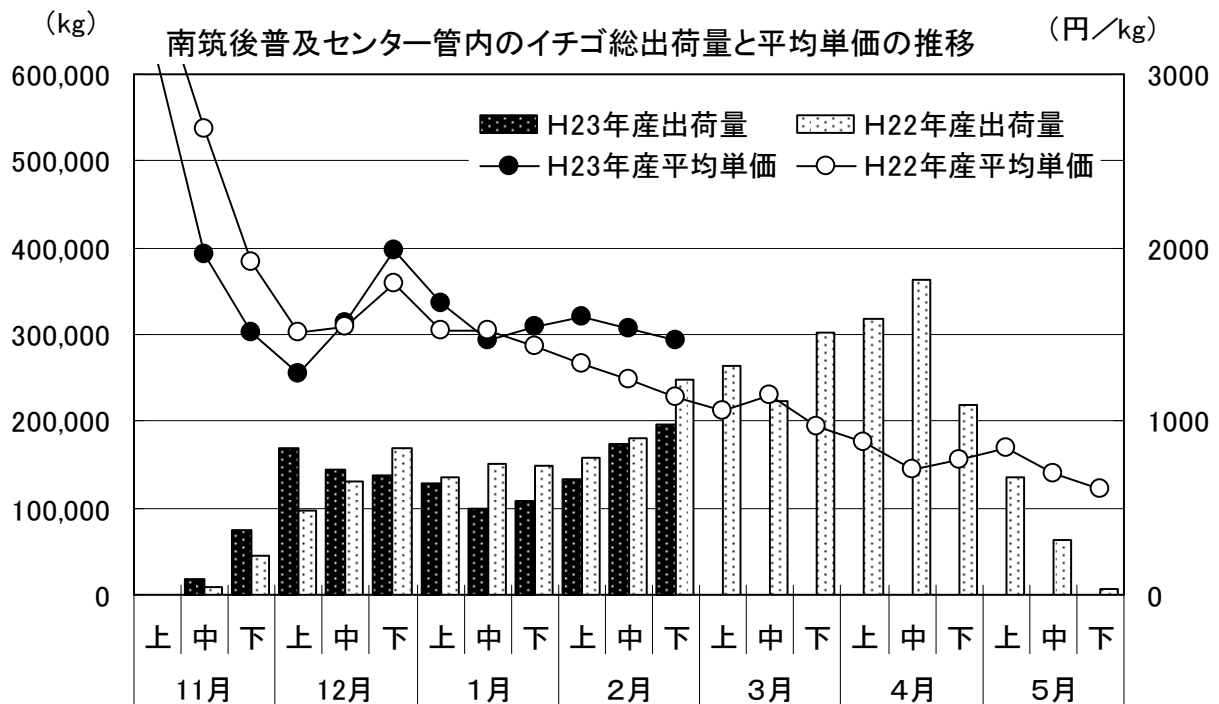
(イチゴ)

J A 福岡大城  
南筑後普及指導センター

2番果房は、着色に時間はかかりましたが、2月下旬より出荷のピークを迎えています。3番果房は、着果から白熟期とばらつきが多くみられますが、全体的には、昨年に比べ早い状況です。

2番果房の着色負担と3番果房の出蕾が重なり、2月上旬は草勢の弱いほ場が多くみられました。しかし、現在では、日長も長くなってきており、草勢は回復傾向にあります。心葉や生育状況を常に観察し、適正な草勢管理に努めてください。

病害虫については、ハダニ、灰色かび病の発生が多くみられています。また、スリップス、うどんこ病の発生もハウス内で散見されていることから、今後、十分な注意が必要です。



## 《かん水・液肥》

かん水は少量多回数かん水を励行する。出荷量増加及び気温上昇とともに、かん水量を徐々に増やすようにする。(pF値1.7前後で管理) また、軟果対策として、「かん水」は収穫直後に行い、収穫前日のかん水は控える。

過剰な液肥は株の立ち上がりの助長や軟弱徒長を引き起こすため、1回当たり窒素成分で0.5~0.7 kg/10aを施用し、4月上中旬で終了する。成り疲れしている場合は、先青果発生防止のために、草勢が回復してから液肥を再開する。

## 《摘果・果梗の除去・芽の整理》

収穫が終了した果梗は、傷果防止と次果房出蕾促進を目的に、随時除去する。

極端に小さい脇芽は除去しつつ、芽数は4～5芽を確保しておく。

3番果房以降の着果数は3～5果/枝に摘果する。(芽数によって調整する。)

## 《温度管理》

3月以降は品質向上を目的に、晴天日はサイド・谷・つま面の換気を早朝より行い、極力低温で管理する。夜温が7℃以上の場合は、夜間も開放状態とする。

3月下旬以降は遮光資材を活用し、昼間の降温対策を図る。(ビニルに塗布を行う場合は、1回目は薄めに行い、4月に再塗布する)

【 3月以降の温度管理の目安 】	
昼間	低温管理 ( 午前 : 18～20℃ 午後 : 18℃以下 )
夜間	5℃ ( 夜温7℃以上は開放 )

## 《軟果対策》

高温期ほど果実の着色が早くなり、収穫遅れによる「過熟果」の発生が多くなる。

高温期には収穫日の間隔を短縮し、収穫時の着色基準を厳守する。

収穫した果実は、収穫箱内での積み重ねを避け、収穫後は早めに低温の場所へ移す。

また、果実付近の通風が悪くなっている場合は、果実表面に「かび」の発生が懸念されるため、葉除け等を行い果実付近の通風を確保する。

## 《電照管理》

草勢と気温をみながら徐々に電照時間を短くし、3月中旬を目途に消灯する。

→目標：3月20日頃に4番果房を出蕾させる！（春先は開花から成熟まで30日程度であるため、4月下旬より収穫が可能となる）

## 《病害虫防除》

### ◎うどんこ病

夜温の上昇で軟弱徒長気味の生育となるため、注意が必要。定期的な予防防除に努める。

また、多発が予想される場合は、軟弱に生育しないように消灯を早くする。

### ◎スリップス類

ハウス内でスリップスの発生がみられる。ミツバチに影響の少ないIGR剤（幼虫にのみ効果あり）等を用いて、防除を行う。

### ◎ハダニ類

ハダニが発生している株は、強めの摘葉を行った後に、防除薬剤が葉裏まで付着するように丁寧に散布する。また、多発を認めた株は、ハダニの拡大防止に被害茎葉の除去を行う。

## 《親株の管理（炭そ病対策）》

3月から株が動き始めるので、早めに下葉の除去を行う。

「炭そ病」は、株の傷口より侵入する機会が多いので、下葉の除去前と直後の防除を必ず行う。特に、除去直後（当日または翌日）と降雨前後の防除を必ず行う。

**農薬の登録使用基準を遵守しましょう！**